

ろくおん 通信

2021年8月1日発行

発行 日本ライトハウス情報文化センター

録音製作係

発行責任者 竹下 亘

電話 06-6441-1017

FAX 06-6441-1027

http://www.iccb.jp/

No.246

今号の内容

- ◎聴いてわかる録音図書をつくるために（第59回）……………1ページ
校正について ～書き方のこと～
- ◎もっと知ろう！「ウェブスタジオ・なにわ」（第31回）……………2ページ
利用者向けサービス「はやみみかわら版」について
- ◎わかる 使える 広がる！ デイジー図書徹底解説（第32回）……………4ページ
最終校正（デイジー校正）のポイント：誤植のある図書

聴いてわかる録音図書をつくるために（第59回）

校正について ～書き方のこと～

録音製作係 木田陽子

このテーマは前々回の「まとめ」で終わりにしたつもりだったのですが、もう少しだけ書かせていただきます。

校正作業が敬遠されがちなのは「相手が誤っているところを伝えなければいけないのが難しい」という認識が原因ではないでしょうか。

音訳関係の資料を見ていたところ、こんなことが書かれていました。

新人の校正者が先輩の校正をしにくいと感じるのは、その施設・団体の中で指導と校正の境界が曖昧であることにも起因します。誤読の指摘は、先輩を指導しているわけではありません。あくまでも事実を指摘しているにすぎませんので、遠慮なく、自信をもって校正にあたってください。

（『音訳指導マニュアル』全国視覚障害者情報提供施設協会）

確かに、校正作業をお願いしたら「先輩の読まれた本の校正なんてできません！」と言われたことは一度や二度ではありません（皆さん笑顔でじりじりと後ずさっていきます）。

いろいろと教えてもらっている先輩の読みを聞いて、誤読を指摘するのはつらい…、多くの方がそう感じておられます。ですが、その指摘に根拠がある（原本や辞書の記述と違う、など）なら、利用者に原本の情報が誤って伝わらないように修正してもらう必要があるわけで、音訳者が先輩だから指摘できない、校正者が後輩だから指摘を無視して良い、ということはないはずです。

もう1つ気を遣うこと、こちらの顔の表情や声の調子がわからない状態で、相手に文字だけで伝える場合が多いことです。

たとえば校正票に「〇〇という読み方（アクセント）は辞書に載っていません」と書いた場合、音訳者が「そうか、校正者の手元にある辞書には載ってないんだな。私の辞書にはあるから、『修正パス』にしよう。」と冷静に考えられる状態なら良いのですが、「載っている辞書もあるのに、間違っているとされた！！」と反発する可能性もあります。

文字で書かれた言葉は会話で聞くよりも冷たく感じがちですが（※個人差があります）、表現が断定口調になると、相手を受けるインパクトが大きくなるように感じます。送信前・提出前に再度、自分で書いた文章を読み返してみることも必要かもしれません。

ちなみに先ほど引用した資料の続きには、こんなアドバイスが載っていました。

例えば、会話文らしく聞こえない場合、「会話文はピークをつけない」と指導の言葉で書くのではなく、「会話と地の文との違いがわからない」というように事実を書くよう努めます。

校正する時は事実のみを指摘すること。また他人から届いた校正票（校正表）は自分を非難するものではないという見方をすること。感情面の問題はそれである程度避けられるかもしれません。勘違いや悪い方への思い込みで、協力体制が崩れてしまうのは悲しいことです。難しくはありますが、お互いに気を付けていきたいところです。



もっと知ろう！「ウェブスタジオ・なにわ」（第31回）

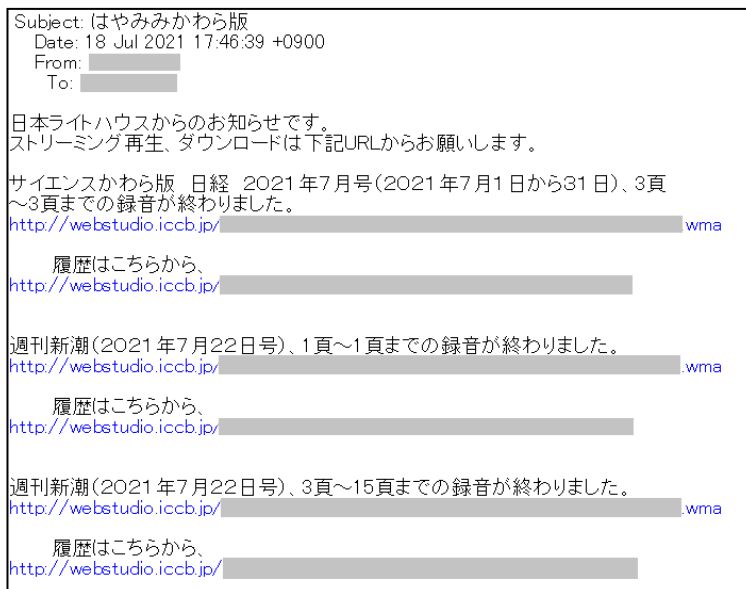
～ボランティアの皆さんから寄せられる質問などを、毎回少しずつ紹介しています～

今回は「はやみみかわら版」について紹介いたします。

録音図書の製作には数か月を要することがほとんどですが、人気の資料を早く聞きたい！という録音図書の利用者のために、製作中のデイジー図書・雑誌の、校正前の音声データを配信する当館独自のサービスが「はやみみかわら版」（以下「はやみみ」）です。

利用者の側から見た「はやみみ」

- 配信対象となっているのは、小説を含むNDC（日本十進分類法）9類の図書と、一部の雑誌です。
- デイジー図書の再生機や再生ソフトウェアは不要です。Windowsのインストールされたパソコンをお持ちであれば、Windowsメディアプレイヤーなどのソフトウェアで聞くことができます。
- 無料で利用できますが、事前に会員登録が必要です（目の見えない人・見えにくい人向けですので、ボランティアの登録は受け付けていません）。
- 会員登録をすると、毎日1回、夕方にメールが配信されます（音声データが1つもアップされなかった日は配信されません）。
- メールには、その日「ウェブスタジオ・なにわ」に送信された音声データを聞くためのURL（ホームページアドレス）が書かれています。クリックすることでデータのダウンロード・再生をすることができます。



- 音声データは未校正の状態で、45分前後で1ファイルとなっています。
- メールでの再配信はしませんので、会員登録前に製作されていた図書や、受け取ったが削除してしまったメールに掲載されていた図書の音声は聞くことができません。
- デイジー図書完成後、一定期間が過ぎたところでデータを削除します。

音訳者側から見た「はやみみ」

- 音訳者が音声データを送信すると、毎日1回夕方に、その日音訳者が「ウェブスタジオ・なにわ」へ送信した音声データ全ての情報がまとめられ、会員宛にメールが自動配信されます。
- 利用者に提供されるのは、最初にページ数・行数を入力して「新規音訳データ送信」

画面から送信したもの、つまり1回目の校正が入る前の未校正データです。「修正済み音訳データ送信」画面で送ったもの、また「新規音訳データ送信」画面から「製作範囲外」にチェックをつけて送信したものについては「はやみみ」で配信されません。

以上の説明を踏まえて、係から音訳者へお願いがあります。下記①～③に関してトラブルが発生した時は、必ず係までお知らせください。

- ① 蔵書の製作開始時に送っていただく「音質チェック」用のデータは、必ず「製作範囲外」にチェックを入れて送信してください。ページ数・行数を入れてしまうと、10～15分しか録音していない音声は「はやみみ」で流れてしまいます。
- ② 音質チェック後、正式に最初の校正に回す音声は、必ずページ数・行数を入力してください（「はやみみ」に流れます）。利用者が1ページから最終ページまでの音声をひとつお聞き聞けるよう、「製作範囲外」は使用しないことにしています。
- ③ ページ数・行数を入れ間違った場合は、係までご相談ください。厳密に変更しなくても良い場合もあります。

※「週刊新潮」の特定の記事（テレビ番組紹介など）は、利用者にとってすぐ必要になる情報ですので、発売当日に収録→ウェブスタジオへ送信していただくことになっています。ご協力をよろしくお願いいたします。

余談ですが、「サイエンスかわら版」は「はやみみ」とは別モノです。こちらは専門音訳・理数チームの製作している月刊のデージー雑誌で、新聞5誌から科学系の記事を選び出し、まとめています。「サイエンスかわら版」のほか、週刊誌の「週刊新潮」、月1回デージー版を製作している「日経パソコン」も、「はやみみ」で流しています。



わかる 使える 広がる！ デージー図書徹底解説（第32回）

このコーナーでは現在、デージー校正について紹介しています。最終の校正となるデージー校正の1番のポイントは、「利用者の立場に立って聞く」です。「最終校正者の耳＝利用者の耳」という特性を活かした校正を心がけましょう。今回から、図書の特徴に合った最終校正のポイントをみていきます。まずは、「誤植のある図書」です。音訳者、編集者の方もぜひご一読ください。

「誤植」の判断は慎重に！

辞書にないから「誤植」だと断定できない場合があります。著者の造語ではないか、著者が意図的に使っているものではないかなど、慎重に判断しましょう。

「誤植」は原則として訂正しない…という考え方

これは、「原本通りに読む」という、録音図書製作の大原則に基づくものです。「音訳者が図書の校正をする必要はない」とも言われます。これは、図書の誤植（ミスプリント）は著者・出版社の責任に属するものであり、承諾なしに音訳者が誤りを正すことには問題がある、という考え方です。ところが、これを、利用者の立場に立って考えるとどうでしょうか？ 目で見れば「誤植」とすぐにわかるものを耳で聞くと、全く別のものに聞こえ、理解を妨げてしまう場合があることに気づきます。そんな場合は、上記の大原則を踏まえたうえで、訂正して読むことが必要になってきます。「原本通りに読む」とは、「目で見て得られる情報と同じ内容を音声で伝える」こととも言えます。

訂正して読むことが必要になる「誤植」

「目で見てわかるもの」は、「聞いてもわかるように」訂正して読みます。

【ろくおん通信No. 219に記載の例】

- ① 目で見れば、よく似た字で誤植だとすぐにわかる場合……「図書館」を「団書館」と誤植
 - ⇒ 「としょかん」と読み替えます。
 - ※ 著者の「造語」である場合もあるので文意をよく確かめ判断します
- ② 目で見れば、誤ったルビだとすぐにわかる場合
 - ⇒ 「元の字」を見て正しいルビを読みます。
 - ⇒ ルビをそのまま読む場合は、元の字も読みます
- ③ 前後の文意から、誤植だとすぐにわかる場合……「～しでた。」「～しすま。」のような誤植
 - ⇒ 「でした」「します」と読み替えます。
- ④ 変換ミスと判断できる誤植……字は違っていても、音読みすれば正しい熟語に聞こえる場合
 - ⇒ そのまま読む。
 - ※ 漢字の補足を入れているケースがありましたが、かえって意味が伝わらなくなります。補足は入れません。

- ⑤ 原本によっては、書かれた通りに読んだ後で、音訳者注として正しい読みの説明をする方法もあります。

調査の段階で見つかった誤植

「電話番号」「番地」「アドレス」「人名」など、調査の段階で「誤植」に気づくことがよくあります。信頼のおける典拠があるものは訂正依頼したくなりますが、原則は、「原本通り」です。訂正して読んだ方がいいと思われる場合は、ご相談ください。

誤植の語彙が別の箇所では正しく記載されている場合

別のところで正しく記載されている誤植は読み替えますが、以下の点に注意しましょう。

- ① 正しいと思われる読み方に典拠があること ⇒ 調査票に記入します
- ② 他にもそういう箇所がないかよく確かめる

最終校正での校正のポイントは2つです

- ① 誤植部分が、「目を見たもの」と同じように伝わるか
- ② 訂正して読んでいる箇所で、「原本通り」の方がいいと思われる箇所はないか

即座に「訂正して読めばいい」と判断できるケースはそう多くはなく、判断に迷うものばかりです。

音訳者、校正者、編集者が同じように迷いながら最終段階に来ています。それまでの指摘が二転三転していて、音訳者はその都度訂正してきたというケースも多く、指摘は慎重にする必要があります。

デイジー校正では、それらのことを念頭に置きながら、もう一度「利用者の立場に立って」聞きます。

※ 校正票記入の際は、理由を書き添えましょう。

※ どうしても迷う場合は館に判断を委ねましょう。

編集者・デイジー校正者ブラッシュアップコーナー

* 編集やデイジー校正の段階で、レベル立てを変更するときは要注意です！

後からレベルを変更する場合は、「見出し」の大小の区別がつくかどうかを再度確かめましょう。以下のようなケースはどうでしょうか？

(例は、柴内裕子、大塚敦子著『子どもの共感力を育む (岩波ブックレット No. 777)』)

を元に作っています。)

【例1】……目次にある項目のみセクション立てする方針、レベル2で音訳開始。

はじめに 2ページ

1、日本の小学校での実践 4ページ

子どもたちと犬との「ふれあい授業」 4ページ

【例2】……編集で、目次にない小項目もセクション立てすることになり、レベル3になった。

はじめに 2ページ

1、日本の小学校での実践 4ページ

子どもたちと犬との「ふれあい授業」 4ページ

小学校で「ふれあい授業」を始めた理由 (目次にない小項目)

- ・例2の場合、レベル3でセクション移動して聞くと、レベル2とレベル3共に番号がないため、見出しの大小の区別がつきません。方法を考え、音訳者に追加録音の依頼をする必要が出てきました。

【方法①】……レベル2の項目を、「1-1」とする案

はじめに 2ページ <レベル1>

1、日本の小学校での実践 4ページ <レベル1>

1-1 子どもたちと犬との「ふれあい授業」 4ページ <レベル2>

小学校で「ふれあい授業」を始めた理由 (目次にない小項目) <レベル3>

【方法②】……レベル1の項目を「1章」、レベル2の項目を、「1」とする案

はじめに 2ページ <レベル1>

1章 日本の小学校での実践 4ページ <レベル1>

1、子どもたちと犬との「ふれあい授業」 4ページ <レベル2>

小学校で「ふれあい授業」を始めた理由 (目次にない小項目) <レベル3>

【追加録音の依頼】

- ・方法①の場合は、「1-1、1-2、……」を読んでもらいます。
- ・方法②の場合は、「1章、2章、……」と「1、2、3、……」を読んでもらいます。
- ・デイジー図書凡例の変更
「この図書の階層はレベル3まであります。レベル3は目次にない小項目です。レベル2の見出しに番号を付けて読んでいます」

館からのお知らせ

★ 「週刊新潮」の編集者を募集中!!!

当館で製作中のデージー雑誌「週刊新潮」の編集作業をしてくださる方を緊急募集しています。月に1回程度、週末～週明けにかけて、10時間程度の音源の簡易編集作業です。

現在は非常に少ない人数で分担しているため、大変困っています。

蔵書よりも簡易な編集の仕方をしておりますし、事前に簡単な講習も実施いたしますので、ぜひ、お力を貸してください。ご協力いただける方は録音製作係までご連絡ください。

★ 専門音訳講習会「小説の読み方コース」 開催のお知らせ

毎日新聞大阪社会事業団と当館が共催する、音訳ボランティアとして活動中の方を対象とした講習会です。要項は当館ホームページにも掲載しております。詳しくは録音製作係（電話：06-6441-1017、メール：rec@iccb.jp）までお問い合わせください。

日 程 9月29日（水）、10月7日（木）（同じ内容で2回開催の予定）

※ 新型コロナウイルス感染症の流行状況によっては、日程が変更となる可能性がございます。

時 間 各回10：00～15：00

会 場 当館4階 会議室

定 員 各回12人（蔵書の音訳経験3年以上で、これまで本コースを受講したことがない方）

※ 人数が多くなった場合は抽選を実施します。

受講料（資料代） 1,400円

申込締切 8月31日（火）必着

★ 休室のお知らせ

8月 8日（日）～16（月）：夏期休館に伴い休室

※17日（火）から活動再開となります。

9月18日（土）：20日（月・敬老の日）の振替

9月23日（木）：秋分の日